

花き

現況

1 キク

奥越の秋植え作型の7月13日調査では、「奥越の舞」で草丈106cm、葉数46枚で7月10日に開花している。「小鈴」では草丈72cmで7月下旬開花予定である。病害虫として、アブラムシ類が少発生、クロゲハナアザミウマが中発生、一部でダニ類が発生している。

春植え作型の調査(7月2日)では、「シューペガサス」(5月2日定植)で草丈58cm、葉数34枚、「小紫」

で66cm、葉数35枚、「小鈴」で52cm、葉数33枚であった。病害虫として、アザミウマ類、アブラムシ類、黒さび病および白さび病が少発生している。一部でべと病、スタントウイロイドも発生している。

今年で13回目を数えるJAテラル越前キク部会品評会は7月20日に審査が行われ、大野市内のショッピングタウンで展示が行われた(写真1)。



写真1 JAテラル越前キク品評会

あわら市の秋植え夏ギクは、開花が7~10日ほど早まっている。アザミウマ類が部分的に少発生、白さび病も少発生している。春植え夏秋ギクは出蕾が6月下旬から始まり、下旬から開花見込みであるが、高温による開花遅延の可能性もある。

福井市の春植え夏秋ギクは、7月17日に調査を行った(昨年7月18日)。福井市二日市町の「小鈴」では草丈58cm、蕾径7mm(昨年:草丈85cm、蕾径7mm)、「花絵」では草丈81cm、蕾径2mm(昨年:草丈97cm、蕾径4mm)、エスレルを2回散布した「小雨」では草丈69cm、蕾径3mmである。中位葉以下にアザミウマ類の食害痕と黒斑・褐斑病の病斑痕が確認された。

福井市東郷地区では、「翁丸」の草丈が65cm、蕾径4mm(昨年:草丈82cm、蕾径4mm)、「小鈴」で草丈70cm、蕾径7mm(昨年:草丈82cm、蕾径6mm)であった。病害虫として、中位葉以下にアザミウマ類の食害痕が多かった。

福井市大土呂町の「小紫」では草丈65cm、蕾径8mmで、7月15日頃より収穫が始まっている。「小鈴」では草丈74cm、蕾径5mm(昨年:草丈79cm、蕾径9mm)であった。病害虫として、中位葉以下にアザミウマ類による食害痕が多くみられた。

7月18日には福井花卉出荷組合で圃場巡回および研修会が行われた(写真2)。

丹生地区の春植え夏秋ギクは、7月17日(昨年19日)の調査で、「小鈴」では草丈88cm、蕾径8mm(昨年:草丈88cm、蕾径6mm)で、昨年よりやや早い。「恋心」は草丈82cm、蕾径7mm(昨年:草丈92cm、蕾径7mm)、20~30%が収穫されている。「翁丸」

は 78cm、蕾径 9mm で収穫が始まった。「花絵」は草丈 94cm、蕾径 3mm (昨年: 草丈 107cm、蕾径 5mm) であった。病虫害は、中位葉以下にアザミウマ類の食害痕、黒斑・褐斑病の病痕が多かった。

越前市の 7 月 17 日 (昨年 19 日調査) 調査では、「はじめ」は草丈 81cm、蕾径 4mm (昨年: 草丈 74cm、蕾径 3mm)、「秀光」は草丈 93cm、蕾径 4mm (昨年: 草丈 90cm、蕾径 5mm)、「恋心」は草丈 97cm、蕾径 4mm (昨年: 草丈 93cm、蕾径 4mm) であった。食害痕等は、特には認められなかった。



写真 2 福井花卉出荷組合 巡回

二州地区の春植え夏秋ギクは 4 月 26 日より定植され、7 月 12 日調査で (昨年 13 日)、「小鈴」が草丈 95cm 蕾径 6mm (昨年: 草丈 89cm、蕾径 5mm)、「花絵」が草丈 88cm、蕾径 3mm (昨年: 草丈 102 cm、蕾径 5mm)、「翁丸」が草丈 79cm、蕾径 6mm (昨年: 草丈 82 cm、6mm) である。病虫害は全体的にアザミウマ類、カメムシ類の食害が多い。

9 月咲き小ギクの草丈は、「映虹」が草丈 62cm (昨年 48 cm)、「おりがみ」が草丈 61cm (昨年 63 cm)、「わかさ」が草丈 56cm (昨年 48cm) と、昨年に比べ生育はやや早く、草丈は長めである。

若狭地区の春植え夏秋ギク (4 月 17 日定植、4 月 29、30 日ピンチ) では、7 月 17 日調査 (昨年 7 月 18 日) で、「翁丸」が草丈 80cm、蕾径 7mm (昨年: 草丈 87cm、蕾径 8mm)、「くれない」が草丈 76cm、蕾径 8mm (昨年: 草丈 80 cm、蕾径 6mm)、「しらかば」が草丈 76cm、一部立弁 (昨年: 草丈 85cm 蕾径 8mm) で昨年より草丈は短いが開花は早くなる見込み。病虫害ではカメムシ類の発生が多い。一用品種で黒斑病の発生がみられる。

露地の 9 月咲きギク (5 月 20 日～定植) の草丈は 7 月 17 日調査 (昨年 7 月 18 日) で「初秋」が草丈 47cm (昨年 58cm)、「大信」が草丈 49cm (昨年 56 cm)、「おりがみ」が草丈 54cm (昨年 67 cm) で、目立った病虫害は特にはない。施設の 10 月咲きギクおよび電照の 11 月咲きギク「ようせい」「白馬」「おりづる」など 6 月中旬に定植された。アザミウマ類の食害が目立つ。寒ギクは「冬一番」「寒桜」「新年の美」が 7 月中旬に定植された。

農業試験場における主要品種の収穫状況は表 1 のとおりである。

表1. 農業試験場 露地圃場における収穫状況(7月31日現在)

品種名	平均収穫日	収穫時草丈	品種名	収穫日	収穫時草丈
はくよう	7月25日～	—	あすか	—	—
さやか	—	—	はなふさ	7月7日	75.2
さぼてん	7月23日～	—	牛若	—	—
花絵	—	—	こずえ	—	—
星の砂	7月23日～	—	ふくろう	—	—
シャロット	7月16日	100.2	七夕かざり	7月23日～	—
白樺	—	—	ひまわり	7月22日	100.3
舞人	7月22日	87.3	シューペガス	7月25日～	—
翁丸	7月25日～	—	奥越の舞	7月12日	75.5
さきがけ	7月22日	81.2			
はるか	7月1日	80.2	清風	7月12日	82.2
織姫	7月15日	77.2	サマーゴールド	7月4日	77.7
とび丸	7月5日	80.1	夏紅車	7月9日	83.2
小鈴	7月25日～	—	砂浜	7月10日	70.2
うたげ	7月10日	75.5	星の輝	6月30日	76.6
玉姫	6月12日	70.2	スーパーイエロー	7月9日	75.5
くれない	7月15日	77.3	新流星	6月24日	70.3
かばちゃん	7月12日	82.1	宝の山	7月14日	82.2
小紫	7月17日～	—	サマー3号	7月3日	86.4
やよい	7月8日	83.2	東海福祉	7月15日	90.2

挿し芽:3月26日、定植:4月11日、摘芯:4月25日、N=30 kg/10a

～:収穫を開始した日を示す

2 ユリ

奥越地区のシンテッポウユリでは、「F1 オーガスタ」の春植え実生苗栽培で、草丈52cm、葉数54枚、春植え中心球栽培では草丈78cmであった。病虫害として、中心球に葉枯病、実生苗では葉先に葉枯病が発生している。あわらの実生苗栽培で、7月17日の調査で、4月下旬からハウスに定植したシンテッポウユリ「F1 オーガスタ」は、草丈80～90cm(昨年60～80cm)で発蕾中。5月下旬に露地に定植した「雷山2号」は草丈20～30cm(昨年10～30cm)でバラツキが大きい。8月下旬～9月上旬に出荷予定である。据え置きを中心球栽培の「F1 オーガスタ」で草丈80～100cmで採花中。2～4輪が多い。

3 トルコギキョウ

坂井北部丘陵地の2度切り栽培のレイナ系、ロベラ系、バルカン系他の品種では、昨年夏に定植した2番花が6月25日くらいから出荷され、7月17日までに80%程度切り終えている。病虫害として、アザミウマ類が一部で少～中発生している。4月～5月定植のクラウン系、ラブミー系、ロジーナ ver.3他の品種では、4月28日前後に定植した品種では、草丈60～80cm、天花を除去中、ボリュームのあるしっかりした株になっている。10～15%の株で、高温ロゼットが発生している。5月25日前後に定植した品種では、草丈30～40cm、10%の株で高温ロゼットが発生している。天花が発蕾し始めているが、ボリュームは不足気味である。フザリウムによる立枯れ病が一部で少発生している。

越前市の7月17日(昨年19日)の調査で、盆出荷用の「モレットマリン」が草丈67cm、蕾長2mmで葉先枯れ症(チップバーン)が少発生している。「かぐや姫」では草丈78cm、蕾長3mm、「ブライダルスノー」では草丈65cm、蕾長1mmで葉先枯れ症が少発生している。収穫は全ての品種でまだ始まっていない。

4 その他

あわら市のアスターは、7月17日の調査で、電照促成栽培作型(3月下旬定植)で6月15日から収穫が始まり、7～10日程度で収穫が終了した。旧盆出荷用作型(4月下旬定植)では、草丈は50～60cmである。

あわら市のストックでは夏播き秋冬どり栽培において、移植のものは7月下旬から定植され、直播では8月上旬から開始予定。これに向けて圃場準備やハウスの土壌の太陽熱消毒を行っている。



写真3 アスターの電照栽培

対策

1 夏期の灌水・高温管理

- 1) 本年は、5月が高温多雨、6月が少雨気味、7月上旬の大雨とその後の高温が続いている。5月の高温多雨により根の伸長が抑制され、6月の水分不足で肥効が悪く、7月の大雨と高温により根が弱っており、水の引きにくかった圃場では根腐れを起こしている品目も見受けられた。排水対策を万全にするとともに、根腐れを起こした株は速やかに除去し、殺菌剤の散布を行う。また高温による開花遅延を軽減するため、夕方から夜間の畝間灌水を行い、夜温を下げる必要がある。
- 2) キクでは生育後半に、上部の葉が小さくなるウラゴケ症状や、新葉がやけるカルシウム欠乏が出る株も見られる。晴天時の黒マルチ内温度は45℃以上になるため、欠乏症がでやすくなる。マルチの一部を切って、穴をあけ、水を灌注する。灌水後の日中は排水溝に水が溜らないように、通路の再整備や溝を掘る等の排水対策を行い、根を健全に維持し、新根の発生を促すようにする。
- 3) 施設は日中、高温になるので、天窗、妻窓、裾窓を開放し、通風を良くする。また、換気扇、送風機等を設置して、ハウス内の空気を循環させるようにする。

2 秋植え夏ギクの苗づくり

- 1) 親株として用いる株は病虫害に侵されていない株とする。とくに、キクスタントウイルス、キクモンサビダニ(紋々病)、白さび病の発生兆候がある場合は適宜防除する。被害が大きかった品種は更新する。
黒さび病の発生がみられた地域では、ステンレス剤の予防散布を励行する。親株床の面積が少ない場合はトンネル被覆等で病菌を死滅させる。しかし、高温時(30℃以上)の散布は薬害のおそれがあるのでさける。カブラヤガの葉裏への産卵を抑えるため、適時防除するとよい。
- 2) 親株として用いる株は、採花前後も灌水、施肥、除草、防除管理を適宜行う。
- 3) 台刈り前には十分灌水を行い、1㎡当たりそさい3号で30g程度を施す。
- 4) 8月中下旬を目安に、親株を地上5cm程度の高さで刈り込む。

3 中輪キクのやなぎ芽の発生と処理

- 1) 9月咲ギクや秋ギクでは、7月下旬から8月上中旬に曇天、降雨などが続いた場合に発生する。定植時期が早い作型では発生しやすい。
- 2) 電照栽培では、停電などで3日間以上電照がストップした時や、電照期間が60日以上と長すぎた場合に発生が多くなる。
- 3) やなぎ芽の発生初期に1番上のわき芽だけを残し、不完全な蕾と他のわき芽を取り除く。なるべく早めに処置を行うことで、草姿がよくなる場合がある。

4 夏期の病害虫防除

夏期の農薬散布は、早朝か夕方の涼しくなってから実施する。また、農薬を複数の剤を混用した場合や、植物体がしおれた状態では薬害がでやすいので注意する。夕方の防除であっても、噴霧直後は熱水が出やすいため、ゴム手袋越しに温度を確認して防除を行う。また、前の薬剤がホース内に残っている場合があるため、最初の薬液は周辺の雑草等に試しかけを行う。薬害が出やすい農薬は薬剤履歴をよく確認して高温時の使用に注意する。

1) ハダニ類

乾燥下で多発する。薬剤は、抵抗性の発達を避けるため、系統の異なるハダニ剤を使用する。圃場の周辺の除草を行うことで隠れ場所をなくすることも重要である。特に7~8月は除草に手が回らないことが多いので注意する。

防除時は葉裏に薬液がかかるよう、噴口をななめ上向きとして防除を行うが、最下部はかかりにくいいため、防除前に除葉する。キクのハダニ類薬剤は、アグリメック、スターナイトフロアブル、ダニトロンフロアブル、コテツフロアブル、ダニサラバフロアブルなどを散布する。多発時は必ず殺卵力のあるバロックフロアブル等の殺虫剤を用い、発生数を減らして、殺ダニ剤を利用すると効果がある。同一系統の薬剤の近接散布は行わない。

2) アザミウマ類

乾燥下で多発する。破蕾後の蕾の中にアザミウマ類が入った場合、防除は著しく困難になるので、破蕾期前に薬剤散布を徹底する。

薄暮時の散布効果が高い。付近の雑草や切り残し花が第一次発生源となるので除去する。

キクを加害するアザミウマ類はミカンキイロ、ミナミキイロ、ヒラズハナ、クロゲハナなど各種があるので、種を確認した上で、薬剤を選定する。ミカンキイロアザミウマ等は、キクえそ病を媒介するので特に注意する。

ミカンキイロアザミウマには、アフーム乳剤、カスケード乳剤などを散布する。それ以外の種にはハチハチ乳剤、プリンスフロアブル等を散布する。

3) アブラムシ類

夏は一時的に数が減少するが、秋には再び繁殖する。葉裏で越冬する個体もみられる。時々葉裏をチェックする。

同一薬剤を連用すると抵抗性がつき、効かなくなるので、系統の違う薬剤を計画的に使用する。とくにワタアブラムシは一生のサイクルが短く抵抗性がつきやすい。圃場の周辺から侵入するので、よく観察し、初期に駆除する。種類によっては、生長点付近のみ発生するもの、葉裏を主体とするものがあるため、同一方向での噴口の防除は避ける。

キクのアブラムシ類薬剤は、ウララ 50DF、アーデント水和剤などを散布する

5 スイセンの管理

- 1) 促成スイセンでは定植前から遮光ネット等を設置して地温の低下を図り、発根と発芽を促すためスプリンクラーや灌水チューブなどによる散水を行い、地温・気温を極力低下させる。畝間灌水の場合は発根部位（球根の根盤部）まで水が回るようにし、回ったらすぐ排水にこころがけ、停滞水がないようにする。
- 2) 季咲スイセンは、9月以降、乾燥した場合は、葉の長さを確保するため、用水が確保できる圃場では灌水を積極的に実施する。

6 ストックの育苗と初期管理

- 1) 播種後の管理は雨よけハウス等で行う。ハウスで管理する場合は、高温対策のためにハウスの屋根の外側に遮熱ネット等を張り、ハウス内の気温を下げる。育苗箱はベンチ等の上で風通しを良くし、灌水は地温の低い早朝に行う。
- 2) 八重鑑別後、葉色が薄い場合は、OKF-1などの液肥を施用する。育苗日数20日程度の若苗定植を心がける。
- 3) 本圃は、クロールピクリンやガスタード微粒剤で土壤消毒する。
- 4) 本圃は、定植5日前からハウスの屋根の外側に遮熱ネット等を張り、ハウス内の気温を下げておく。2~3回に分けて十分に灌水して畝全体の水の通りをよくしておく。
- 5) マルチを張る場合は土壤水分が十分にあるときに、土面と隙間がないよう密着するように張る。隙間があると風であおられるばかりでなく、地温が高くなる。
- 6) 定植後は直ちに灌水し、液肥を施用し、活着を促す。
- 7) 直播栽培では、立枯れ性の病害を予防するために有機質肥料の施肥は早めに行い、栽培床に十分灌水しておく。また、播種時の地表面の温度を極力下げるため、播種の5日程度前から70~80%の遮光資材をハウスの屋根にかけて、風通しを良くして地温の低下に努める。播種後は土を乾かさないように灌水し、発芽後は苗の徒長防止のため、直ちに遮光資材を取り除き、灌水は土の表面が乾いたら行う。
- 8) 立枯れ性病害が発生した場合は、被害株を抜き取り、病原菌を調べる。立枯病（リゾクトニア菌）では、発病株を引っ張ると、地際からちぎれるが、ピシウム菌の場合は、引っ張ってもちぎれずに根がついてくる。立枯病（リゾクトニア菌）が発生した場合はリゾレックス水和剤を土壤灌注し、ピシウム菌が発生した場合はリドミル粒剤2を土壤表面散布する。

7 ハボタンの定植と初期管理

- 1) 切り花ハボタンは草丈を確保し、細く作り上げる必要がある。施設栽培の場合は、前作の肥料が残っている場合があるので、土壤分析を行ってから栽培する。露地栽培の場合は、基肥として石灰質肥料10~20kg/a、窒素、リン酸、カリを成分で各1kg/a施用する。
- 2) 本葉が2枚の若苗の時期に、12cm角ネットを使用し、1マスに1株植えつける。苗が老化する前に直ちに定植する。
- 3) 定植後、活着するまではしっかりと灌水をする。活着後は、土の表面が乾いたら灌水をし、草丈確保のため、乾燥しすぎないように注意する。

参考：アメダスの気象データ



